連載　第104回

私のはんせい記

～「改修設計」事始め ～

建築家　三木　哲

エスファハーンのイマーム広場

古代ペルシャ帝国の都、ペルセポリスの遺跡

● 見事なエスファハーンの広場と建築

トルコのボスボラス海峡が、東洋と西洋を隔てる分岐点で、この海峡の西側がヨーロッパで、東が東洋である。

東洋に生まれ生活してきた私は、当たり前のことだが東洋に親近感を感じ肌に合う。建築も東洋の建物に親近感があり好きである。

1979年、親米のパフラヴィー王朝はホメイニ師の思想によるイスラム教シーア派の運動により打倒され、イランイスラム共和国が成立した。

アメリカはヴェトナムに続き親米政権が倒された。

1970年代、イラン人労働者が日本の建設工事現場で働くのをよく見かけた。彼らは勤勉で人なっこく、親しみを覚えた。

そんなわけで、日本建築学会が呼びかけたイラン建築見学ツアーに積極的に参加した。

空路でテヘランへ、首都テヘランから宗教都市コム、紀元前500年頃建設された古代ペルシャの砂漠の中の遺跡ペルセポリスを廻り、エスファハーンからカスピ海まで貸切バスで回った。

革命直後のツアーで、国全体にある種の緊張感があった。

例えばホテルで食事の際には一切、アルコール類は禁止されていた。

イスラム革命の聖地コムでは、カメラを下げた日本人のツアーの集団がバスから降り街を三々五々見学しようと移動していたところ、興奮した現地の人々が集まり出し、群衆化した民衆に取り囲まれバスの中に緊急避難する事件もあった。

アケメネス朝古代ペルシャ帝国が、紀元前500年頃建設したペルセポリスのユネスコ世界遺産遺跡を砂漠の中で見た。イランの歴史の厚みをこの廃墟に見る思いであった。

これとは対照的に、歴史があり現代でも生きた活動する都市、エスファハーンには感動した。

広大な広場とモスクとアーケードを目の当たりにして、イスラム建築の美しさに感激し圧倒された。

街は、16世紀末にサファヴィー朝の首都に定められ発展した。16世紀以前に建設された旧市街と、アッパース１世が建設した新市街で構成される。

イマームモスクがある広場のスケール感と美しさには圧倒された。巨大なイマーム広場を囲んでモスクや回廊が四方に配され、見事な景観が展開する。建物を飾る壮麗なタイル細工も素晴らしい。

イスラム建築の頂点の姿がここにあった。

広場を囲む広大な回廊の天井が高いドーム状に奥まで続くアーケードには様々な店舗があり、イランの工芸品も豊富に売られていた。

どこまでも奥まで続く賑わいのあるアーケードが延々と続く。

あまりに美しい装飾ときらびやかな商品。しかも優れた音響効果を得るための機能美。

アッバース１世が建造した広大なパティオに面するアリカプ宮殿。

ヨーロッパの都市やキリスト教建築に感じる違和感とは全く異なり壮大で明快なイスラム建築の美しさに圧倒された。

ヨーロッパのキリスト教を根底に持つある種の脂っこさとは全く異なり単純、明快で親しみを強く感じる美しさがそこにあった。

広場や建築とそこに集い活動する人々の間に何ら違和感がなく自然である。

イランは、ユッタリした時間が流れている印象で、豊かで親しみやすい人々と接することができた。

カスピ海をクルージング船で遊覧し、チョウザメのキャビアをおみやげに帰国した。

みき・てつ
㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。
URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。
建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。